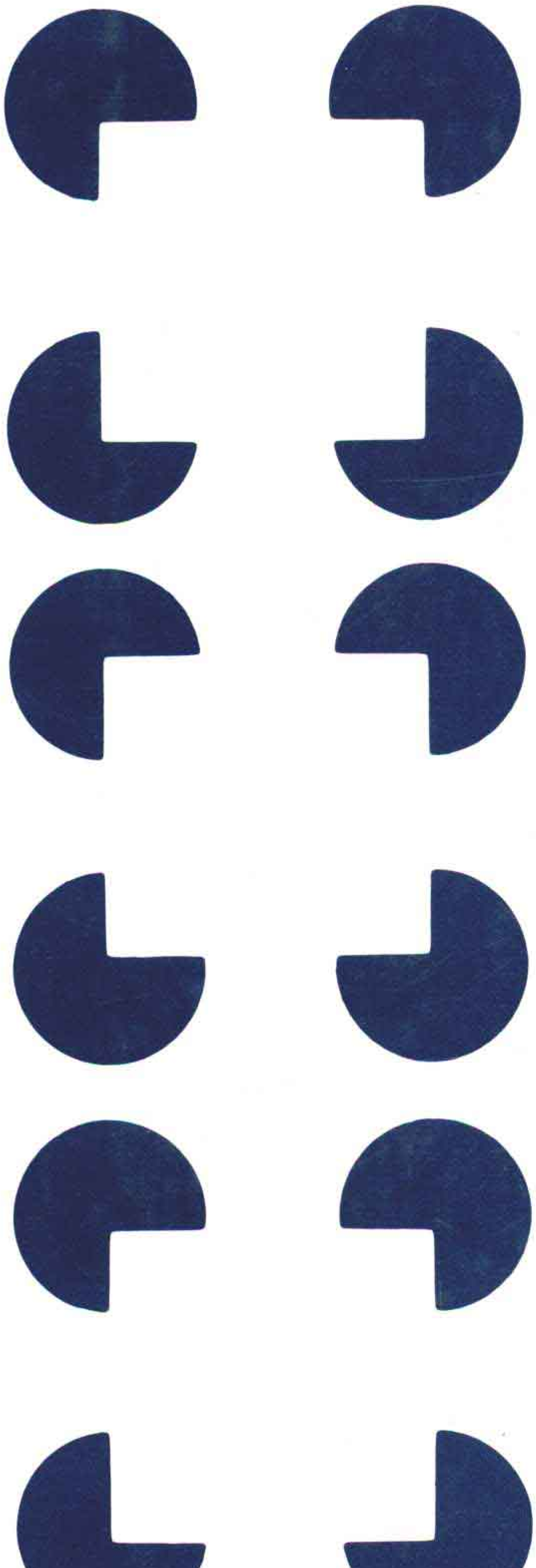
# 心理学

鹿取廣人/杉本敏夫──[編]

東京大学出版会



# 心理学

鹿取廣人／杉本敏夫——［編］

東京大学出版会

**編者紹介**

鹿取 廣人（かとり・ひろと）
1928年　埼玉県に生まれる
1954年　東京大学文学部心理学科卒業
現　在　東京大学名誉教授・文学博士
専　攻　知覚・認知心理学，発達心理学
**主要著書**
「図形認知の発生条件」（東京大学出版会），「認識の形成」（共著　小学館），「人間の成長」（共著　小学館），「現代基礎心理学 10　発達II」（編著　東京大学出版会）

杉本 敏夫（すぎもと・としお）
1929年　東京市に生まれる
1954年　東京大学文学部心理学科卒業
　　　　元 日本女子大学人間社会学部教授
専　攻　思考心理学・情報科学
**主要著書**
「ホーンブック心理学」（共編著　北樹出版），「文科系の計算機入門」（ブレーン出版），「情報科学への招待」（培風館）

心理学

1996年9月20日　初　版
2002年5月24日　第9刷

［検印廃止］

編　者　鹿取廣人・杉本敏夫

発行所　財団法人　東京大学出版会
　　　　代 表 者　五味文彦
　　　　113-8654 東京都文京区本郷7東大構内
　　　　電話03-3811-8814・振替00160-6-59964

印刷所　株式会社理想社
製本所　有限会社永澤製本所

©1996 Hiroto Katori and Toshio Sugimoto
ISBN 4-13-012029-8　Printed in Japan

R〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは，著作権法上での例外を除き，禁じられています．本書からの複写を希望される場合は，日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡下さい．

# 序

長年にわたり広く教科書として使用されてきた故高木貞二編の『心理学』(初版 1956 年，故小笠原慈瑛改訂の第 3 版 1977 年）の続編にあたる本書が計画されたのは，いまから数年まえのことである．「大学における一般教育の教科書または参考書，また一般の読者にたいする心理学の入門書」という性格は，本書にも引き継がれている．本書は，前書高木編『心理学』からあとの学問の進歩に対応するとともに，前書と同様に，入門書としての基本的な事実を盛り込むことを編集方針とした．

ところで，従来の入門書が知覚，学習，要求，個人差，発達，社会などの章からなっていて，通読したときに心理学の全体の姿が見通しにくい傾向にある点を反省し，I 部「こころのありか」(1-3 章）を設け，現代のこころの科学としての心理学がどのような道をたどって成立したか，また心理学はなにを目標として，どんな問題を解決しようとしているか，といった全般的な見通しを与えることを基本方針とした．

計画の初期には，本書の全体をこの立場で貫くという考えもあったが，基本的事実をすべて組み込むにはかなり無理があるため，従来とほぼ同様な章立てのII部「こころのはたらき」(4-10 章）を設定した．しかし，各章をできるだけ相互に参照しあうようにして，基本方針を生かすように努めた．またいくつかの章の後半には神経学や行動の障害についての知見を配置して，行動やこころの働きを包括的に捉えるための手がかりを提供しようとした．この点も従来の教科書とはちがう特色といえよう．III部「こころの探求」(11 章）は，I 部に呼応して歴史的な見方をふたたび与えることにした．

これらの章は順番に学ぶ必要はない．教授者によってはII部からはじめて，I 部を後にまわしてもよいであろう．しかし編者の一人がI部の原稿を入門コースの教材として試みに与えたところ，〈通俗的〉な理解とは異なった心理学の多様な側面に興味をもたせることに成功した．

1章は，こころを意識として捉える立場から始まった心理学が，多くの研究方法を取り入れて発展した経緯のうち，とくに客観的に外側から観察される「行動」に限定しようとする主張の強い影響を受けて，現代の科学的な心理学が成立するまでを，具体的な研究例をとおして述べている．(鹿取)

2章は，人間や動物の行動の分析を手がかりにして，こころの働きを捉える立場に立って，生まれつきの反射から，習得的な行動様式を経て，人間のもっとも高次なシンボルの働きに支えられた言語と思考について述べる．また発達的な観点から意識の成立に触れる．(鹿取)

3章は，こころの働きや特徴が，生まれつきのものか，経験をとおして獲得されたものか，すなわち遺伝と環境の相互的な作用を述べる．ここまでが1つのまとまりをなしている．(鹿取)

4章は，新しい行動様式が習得されるこころの働きとしての条件づけ，技能の学習，模倣などを取りあげる．さらに知識が習得される記憶の現象を長期・短期の両面にわたって扱う．また，こうした学習，記憶を成立させる神経学的な基礎を述べる．(篠原，斎賀，河内)

5章は，人間の行動を始発，方向づけ，推進，持続させるこころの働きである動機づけならびに情動について述べる．食，性のような基本的な動機づけの特徴，喜怒哀楽のような基本的な情動の働きを概観し，人間に特有の動機づけを論じ，欲求不満の現象などを扱う．(金城)

6章は，環境世界の状況を捉えるこころの働きである感覚と知覚を扱う．それはたんに，在るがままの世界を受け入れるというような受動的な働きではなく，感覚系と運動系の活動をとおして状況を捉え，見分け，状況に応じて適切な行動を行なう働きである．この働きはさらに，先天盲が開眼手術後に初めて見る世界，脳損傷者の認知の特徴などの研究を通じて，その本性が明らかにされる．(鳥居，下條，河内)

7章は，洞察による問題解決を扱い，こうした思考の働きを支える概念の形成，イメージや言語の重要さを述べ，発見に導く推理の様相を論じる．また言語の未発達期のコミュニケーションから対人関係の発達を基礎におく言語の展開までを解説する．さらに脳損傷者に見られる言語や行為の障害を解説する．(杉本，鹿取，河内)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

8章は，人間1人1人の行動様式の違いすなわち個人差を問題として，その人特有の個性ともいえるパーソナリティを取りあげる．それは知的・認知的な行動の側面である知能，および情動的，意志的な行動の側面である性格として捉えられる．種々の検査法とともにその特徴を解説する．さらにその不適応と障害を取りあげる．（金城，丹野）

9章は，他者を含む社会という環境における行動を取り扱う．すなわち他者や出来事の認知の仕方，態度の変化をもたらす説得などの働き，他者の及ぼす多様な影響と対人関係，集団の中の個人などの主題を取りあげ，社会という広い文脈の中での行動の特徴を解説する．（安藤，末永）

10章は，こころの働きと行動の変化の過程である発達の問題を扱う．そこには成熟と学習の2つの要因が相互に関わりあって影響を与える．発達においては，心理的なある働きが飛躍的，質的に変化することが注目され，発達段階の考え方が提出されているが，そのなかでも代表的なピアジェの発達段階説について述べる．（斎賀）

11章は，哲学的なこころの考え方から，自然科学の研究方法を取り入れて科学的な心理学が発展した経緯，それまでの意識を中心的な主題とした立場から，客観的に観察可能な行動へと主題を限定した流れ，そして情報科学と脳神経生理学の発展に促されて，今日の意識と行動を科学的に研究する心理学が成立するまでを概観する．（末永）

各章をとおして，動物と人間の比較の観点を重視している．そこで必要な場合には，生物的存在として考えるときは〈ヒト〉，社会的存在として考えるときは〈人間〉と記すことにした．

本文は基本的な内容の叙述とし，さらに本文の理解を助けるために小さな文字のトピックを随時挿入して，関連のある研究内容を解説した．後者は講義の進行を早めるために，学生の自習に任せてもよいであろう．

入門的な教科書の性質上，本文中に用語や人名の原綴り，および研究の年次を入れることは，原則として省いた．ただし，その領域で古典的な研究についての年次は，研究の開始を知る手がかりとなるので挿入してある．用語や人名などの原綴りは索引で知ることができる．詳細な人名と年次が必要ならば引用文献を見るか，または章末の参考書から調べてほしい．以上の原則

の例外は，トピックの中および歴史的な叙述を中心としたⅠ部とⅢ部である．

編集方針の一部変更と執筆者の範囲の拡大に伴って，完成まで予想以上に時間がかかった．執筆者には，2倍もの長さの原稿を短縮していただいたり，初学者を予想しての平易な文章への書き換えをお願いしたりしたが，いずれも快く応じていただいた．また必要に応じて編者が本文やトピックを補ったが，これについてはもちろん，編者がその責を負うべきものである．図や写真の原稿は，編者の責任により大部分は画き直し，写真の多くは線画に直した．東京大学出版会の英断により2色刷りが可能になったので，網版を多用して変化をつけた．

長年にわたる編集の期間を，辛抱強く支え，多くの新味を盛り込む示唆を与え，見事な書物に仕上げてくださった東京大学出版会の伊藤一枝さんに感謝する．

1996年7月

編　者

# 目次


## I部　こころのありか …… 1

**1章　心理学の視点** …… 3

1.1　はじめに …… 3
1.2　心理学の方法 …… 4
1.3　行動研究と心理学 …… 15

**2章　行動の基本様式** …… 21

2.1　行動の水準 …… 21
2.2　感覚支配的行動 …… 23
2.3　習得的行動 …… 28
2.4　シンボル機能 …… 31
2.5　意識と行動 …… 38
2.6　意識の成立過程 …… 41

**3章　遺伝と環境** …… 47

3.1　行動発達を規定する要因 …… 47
3.2　初期経験の効果 …… 51

## II部　こころのはたらき …… 61

**4章　学習・記憶** …… 63

4.1　条件づけ …… 63
4.2　技能学習 …… 73
4.3　社会的学習 …… 75
4.4　記憶 …… 78
4.5　学習・記憶の神経学的基礎 …… 90

**5章　動機づけ・情動** …… 99

5.1　食と性の動機づけ……………………………………………… 99
5.2　基本的情動……………………………………………………103
5.3　親和動機づけ，活動と探索の動機づけ…………………………106
5.4　達成と自己実現の動機づけ……………………………………111
5.5　フラストレーションとコンフリクト……………………………114
**6章　感覚・知覚** ……………………………………………………119
6.1　感覚の分化と統合………………………………………………119
6.2　網膜と機能の分化………………………………………………124
6.3　色彩知覚…………………………………………………………126
6.4　視知覚の適応性…………………………………………………129
6.5　視知覚の独立生…………………………………………………134
6.6　初期視覚過程……………………………………………………136
6.7　先天盲と初期視覚………………………………………………145
6.8　認知機能の障害…………………………………………………154
**7章　思考・言語** ……………………………………………………159
7.1　問題解決…………………………………………………………159
7.2　知識………………………………………………………………163
7.3　推論と発見………………………………………………………172
7.4　非言語的コミュニケーション…………………………………181
7.5　言語的コミュニケーション行動の形式…………………………184
7.6　脳損傷と高次機能の障害………………………………………188
**8章　個人差** …………………………………………………………195
8.1　知能の測定………………………………………………………195
8.2　知能の因子………………………………………………………199
8.3　知能発達の要因…………………………………………………201
8.4　性格………………………………………………………………203
8.5　パーソナリティ発達の要因……………………………………210
8.6　パーソナリティの不適応・障害…………………………………212
**9章　社会行動** ………………………………………………………219
9.1　社会的認知………………………………………………………219
9.2　自己………………………………………………………………222

9.3　態度と説得 …… 224
9.4　社会的影響 …… 226
9.5　対人魅力と対人関係 …… 228
9.6　集団の中の個人 …… 230
**10章　発達** …… 235
10.1　発達的変化—分化と統合 …… 235
10.2　遺伝と環境 …… 236
10.3　発達の捉え方 …… 238
10.4　身体の発達 …… 239
10.5　認知機能の発達 …… 240
10.6　社会的行動の発達 …… 246

## Ⅲ部　こころの探求 …… 251

**11章　心理学の歴史** …… 253
11.1　「こころ」の概念 …… 253
11.2　精神医学の影響 …… 257
11.3　感覚の研究 …… 260
11.4　心理学の成立 …… 262
11.5　生物科学の発展とその影響 …… 263
11.6　科学としての心理学の展開 …… 267

引用文献 …… 275
人名索引 …… 283
事項索引 …… 285

# I 部 こころのありか

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 1 章 心理学の視点

この章では，はじめて心理学を学ぶにあたって，どのようなことを心得ておかなければならないかにふれ，ついで，現代の**こころの科学**としての心理学が成立するまでに，先人たちはこころを理解するためにどのような努力をしてきたかについて，歴史的な経緯を簡単に述べる．すなわち，意識内容を内観によって捉えようとして出発した科学的心理学が，発達研究や動物研究，またこころを障害の面から捉える病理学的研究など種々の研究法を取り入れつつ，いかに発展してきたかを簡単に記述する．なかでも行動主義の立場は，心理学の研究対象を意識内容の内観報告ではなく，客観的に外側から観察される〈行動〉であると主張して，心理学の考え方に大きな変革をせまった．そこで，このような反省の上に立つ現代の心理学では，こころをどのように扱おうとしているかについて述べることにする．

## 1.1—はじめに

### 1.1.1—こころの問題と心理学

この本は，はじめて心理学を学ぼうとする人たちのための一般的なテキストブックであり，現代の心理学における基本的な考え方とその理解に必要な基礎的な知識を提供しようとしている．

心理学に関心をもち，これから心理学を学ぼうと思っている学生諸君の中には，心理学で学んだ知識をもとに，こころの悩みやさまざまな障害をもつ人たちに，援助の手を差し伸べたいと思っている人も多いにちがいない．また心理学を学ぶことによって，自分自身の**こころの問題**の解決にとっての指針を得たい，と考えている人もいるだろう．

たしかに心理学は，そうしたこころの問題に強い関わりをもってきたのであり，いままでに，多くの研究がおこなわれてきた．また，心理学のいくつかの応用の分野では，このような問題に対処し解決するための具体的な方策

をさぐる努力をしてきた．そして現在，すでに多くの分野で実際に役に立つようになってきている．

### 1.1.2—基礎と応用

**心理学**は，その言葉のとおり，こころについての科学的研究を目指す学問である．心理学の最終目標は，人間の**こころの理解**であり，その理解を通して，なんらかの形で人類の福祉に役立つことを目指している．

しかし，そのための手っとり早い簡便な方法は存在しない．通俗雑誌の記事に見られるような表面的な，短絡的な理解は，間違いを生じやすいし，ときにはむしろ有害である．むしろその代わりに，地道で長い研究の積み重ねが必要なのである．

したがって，心理学を上に述べたような問題意識から学ぼうとする人たちも，回り道をして，まず，動物の条件づけの研究とか，ヒトの基本的な情報処理のメカニズムとかの，心理学の基礎的な知識とその思考方法を身につけることが必要なのである．

そうした基本的な考え方と知識を身につけることによって，新しく開発されてくる応用的な手法を理解することができるようになるし，またときには，自分自身で適切な手法を工夫することもできるようになる．

しかし，基礎的研究も，ただアカデミックな実験室だけから生み出されるとはかぎらない．具体的な実践の場面からの課題の要請に応えることから，あるいは心理学者みずからが具体的な実践をおこなうことによって，新しい基礎研究の視野が開けてくることも多い．そうした要請に応えることによって，基礎研究は，足腰の強い基盤を備えるようになる．

心理学を新たに学ぶにあたって，まずこのような基礎と応用の両者の関係をこころに留めておく必要があるだろう．

## 1.2—心理学の方法

### 1.2.1—こころの理解と実証的方法

人のこころを理解しようとする試みは，まさに人間の歴史とともに古い．先人たちは，長い歴史の間に多くの努力を重ね，さまざまな方法を工夫してきた．その歴史的な経緯については，11 章で詳しく述べることになる．こ

こでは，現代の心理学の視点やその方法を理解するために必要な限りで，先人たちの工夫の跡を簡単に辿っておくことにしよう．

19世紀の西欧では，**実証主義**の気運がさかんになる．それに伴って，物質の作用や構造についての科学的研究がおおいに活発化して，その成果が社会的に集積されつつあった．さらに，生物の身体的構造ばかりでなく，ロマネス（G. J. Romanes, 1848-1894）やダーウィン（Ch. R. Darwin, 1809-1882）などによって，**動物の行動**を知ろうとする研究もおこなわれつつあった．こころについても，同じように，実証を重んじて科学的研究をおこなおうとする関心が高まり，いくつかの試みがおこなわれるようになってきた．

1860年，フェヒナー（G. T. Fechner, 1801-1887）による感覚量の測定をもとにした**精神物理学**の創設や，1885年のエビングハウス（H. Ebbinghaus, 1850-1909）による記憶に関する実験的研究などは，その例である（トピック11-6参照）．

そうした時代精神の中で，ヴント（W. Wundt, 1832-1920）は，心理学の体系化を試みた．その時ヴントは，心理学の対象を，われわれが直接に経験する**意識内容**であるとし，その研究には，内観法を用いるべきことを主張したのである．ただしその**内観**は，それまでの哲学的な心理学の方法とは違って，研究者自身による内観ではなくて，実験的手法によって得られた，第三者によるそれであった．これは，客観的な実証性という点で，それまでの心理学から一歩前進したということができる．

### 1.2.2—こころの働きと内観

科学としての心理学を構築するためには，実証的なデータをもとにしなければならない．そのため，ヴントは，実験室内という統制された条件のもとで，統制された刺激を，第三者である被験者に提示して，この被験者に，そのときの意識体験の**内観報告**を求めた．こうした実証的データをもとにしてヴントは，新しい科学的な心理学を創ろうとしたのである．

したがって，その心理学はそれまでの学者先生個人の心理学ではない．当時，このヴントの心理学は，それまでの〈安楽椅子心理学〉（arm-chair psychology）とは違って，額に汗して集められた実証的データをもとにし

た，より客観性のあるこころの科学であると考えられたのであった．そのためヴントの心理学は「新心理学」として注目され，その研究室には，ヨーロッパばかりでなく，アメリカからはティチェナー（E. B. Titchener, 1867-1927）やホール（G. S. Hall, 1844-1924），それに日本からは松本亦太郎（1865-1943）など，多くの国々からすぐれた研究者がそのもとで実験的な手法の訓練を受けようとして集まった．これらの研究者たちは，その後，各国での心理学の発展に寄与することになるのである．そこで得られた感覚様相（感覚モダリティ）（6.1.1項参照）のデータは，現在でも十分示唆に富む情報を含んでいる．

こうした内観法をもとにした心理学は，少なくともそれまでのような研究者個人の心理学ではない．しかし反面それは，十分訓練を受けた選ばれた被験者についての，そして内観に熟達した人々についての，限られた対象の心理学であった．それは，信用のおける内観報告が可能な人の，ということは知的で，そして〈正気な〉状態の，成人についてのみの心理学であった．

### 1.2.3—個体発生的研究と心理学

人間のこころを理解するには，もちろん，こうした対象だけを相手にしていたのでは十分ではない．人は，生まれてから，乳児・幼児・児童期，さらに青年期から成年期を経て老年期に達し死に至るまで，さまざまな心的状態を経過していく．その間に，また独自の心的機能を営んでいる．とくに生まれてから，成人に達するまでの成長過程では，その心的機能は，大きく変化する．こうした発達変化の様相とその変化を規定する条件を分析し，そのメカニズムを明らかにすることは，理論的にも興味のあることであるし，また実践的にも重要である．

しかし，ヴントの心理学では，子どもの内観報告は訓練をうけた成人のそれと比べて信用がおけないものとして，**発達研究**は軽視された．そこで，ことばをまだしゃべることのできない新生児や乳児のこころの働きの研究は，アカデミックな正統の心理学からは，当然除外されることになった．

こうした発達研究ないし**個体発生的研究**は，当時すでに，ダーウィンをはじめ何人かの研究者によって，自分の子どもを対象とした行動観察の研究として散発的におこなわれていた．しかしそうした研究が，心理学で真面目に

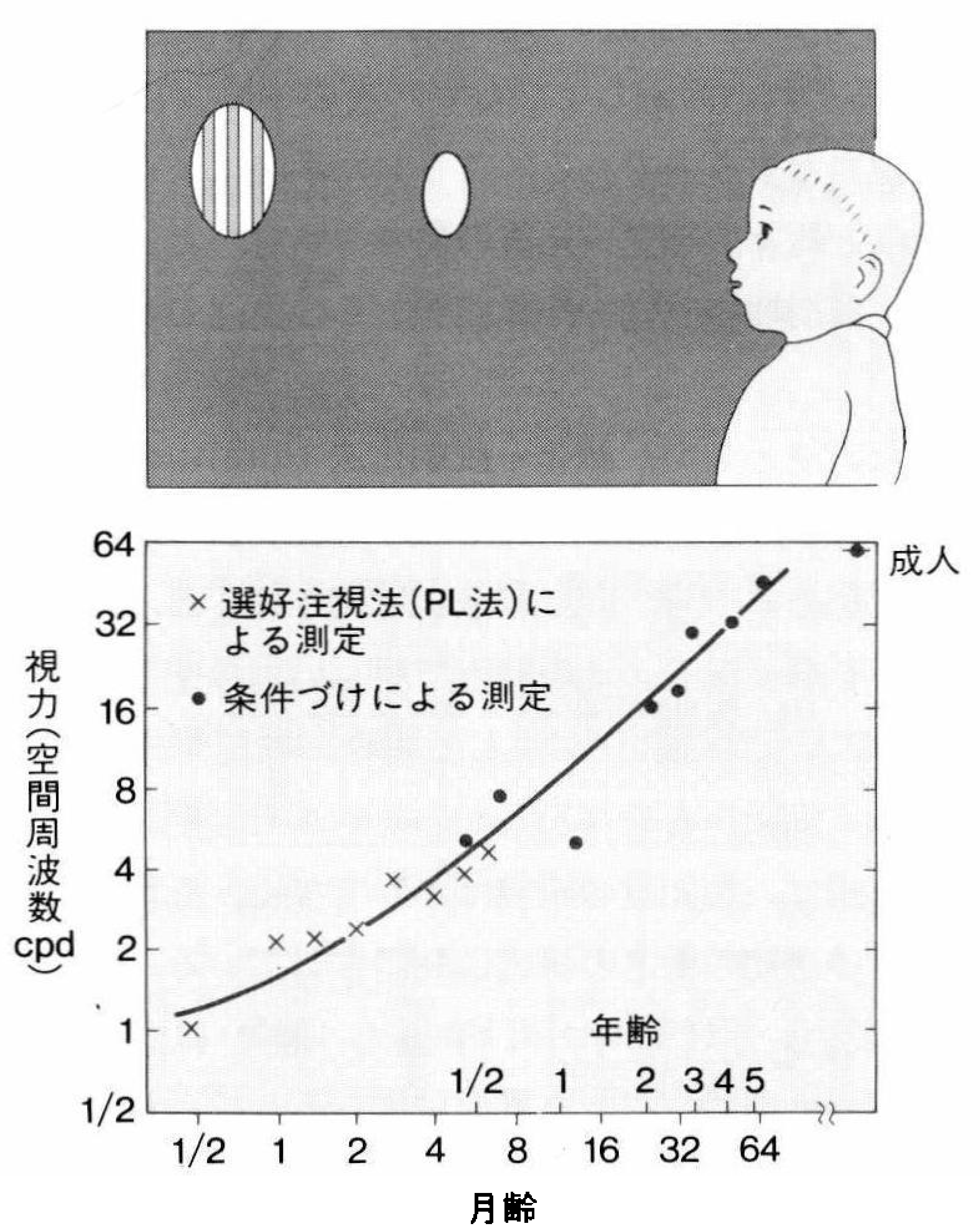
取り上げられ，1つの大きな分野として確立されるようになるには，20 世紀半ばまで待たなければならなかったのである．

現在では，ことばをまだしゃべることのできない新生児・乳児の示すさまざまな行動の分析から，乳児の認知的な働きをはじめとして，こころのさまざまなメカニズムが明らかにされつつある（トピック 1-1）．

**トピック 1-1　乳児の知覚・認知研究**

ことばをまったくしゃべることができない乳児の知覚や認知の研究の場合，行動的データに頼らざるをえない．研究の初期には，大まかな体の運動を目印にしていたが，それでは十分の知見は得られない．1960〜70 年代頃から，組織的な行動的手法が開発されて活発な研究がおこなわれるようになってきた．

視知覚の研究には，**選好注視法**（PL 法，preferential looking technique）といわれる方法が一般的に用いられている．これは，乳児が適度の刺激変化に敏感に応答し，変化のある刺激に視線や頭を向けるといった反応傾向，いわゆる定位性反応の傾向を利用する方法である．たとえば，縞視力測定では，粗い縞模様から細かい縞模様までの種々の空間周波数（視角 1 度あたりの黒・白の縞の数）




**図A　選好注視法の実験と縞視力の結果**（Atkinson & Barlow, 1982 を改変）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com